

岡山大学病院に「渡航ワクチン外来」を開設！ 華々しくプレスリリースをしたのは2020年7月30日だった

萩谷英大

岡山大学病院 感染症内科



2019年の大晦日、中国・武漢の華南海鮮城（海鮮卸売市場）に関連すると推測される「原因不明のウイルス性肺炎」の症例が、周辺医療機関で約30例発生していることが発表された。その後、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）と命名された新興感染症は瞬く間に全世界に拡散し、2020年1月30日には世界保健機関（World Health Organization：WHO）のテドロス事務局長が、『国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態（Public Health Emergency of International Concern：PHEIC）』に相当することを発表した。世界各国で歴史上例を見ないロックダウンが実施され、まさに全世界規模の感染症パンデミックが発生したのは、今から3年半前であった。

当時、筆者は自施設での患者診療やマネジメント業務に追われながら、岡山市保健所の医療コーディネーター、岡山県庁コロナ対策室の岡山県クラスター対策班の感染管理医師として活動するなど、多忙を極めていた。そんな中、1年ほど前から着々と準備をしていた「渡航ワクチン外来」をスタートしたのが2020年9月であった。読者の皆さんもご存じのように、当時は海外往来が極めて難しくなり、海外から来日する外国人（インバウンド）、日本から海外に行く人（アウトバウンド）はゼロと言っても過言ではない状態であった。『「渡航ワクチン外来」なんて、何のために始めるの？』と直接聞く人はあまりいなかったが、

心中では筆者が始めた「渡航ワクチン外来」の意義を訝しく思っていた人もいたであろう。当時は海外渡航に際し「PCR陰性証明書」の提示を要するケースが多く、「渡航ワクチン外来」の機能はこの「PCR陰性証明書」を発行することと勘違いしていた人もいたと思う。



そんな黎明期を経て、COVID-19のパンデミックも終わりを告げた今、海外との往来が再び日常化している。グローバル化のアクセラレーションとなり、アウトバウンド人口はうなぎ上りに増加している。閑古鳥が鳴いていた岡山大学病院の「渡航ワクチン外来」にも、今は旅行・留学・短期／長期出張のためにワクチン接種を希望して受診する人が急増している。「所変われば品変わる」という言葉の通り、感染症の疫学は渡航場所によって異なるため、外来診療では相応の知識は必要であり、一般診療とは一線を画すると思うが、渡航先での生活や仕事内容について話を聞くのは非常に楽しいものであり、忙しいながらも、新たに受診される方を待ち遠しく思っている。

本特集では、感染症や渡航医学の分野で活躍している先生方に、その豊富な知識・経験を誌面上で存分に披露していただいた。ワクチン接種のニーズが高まる中、今後は総合診療領域でも渡航ワクチンが普通に扱われることを期待しており、本特集がその一助になれば幸いである。G